□書　評□

吉植庄平（青梅市立総合病院長／東大講師）著
「発　熱　——診かたとその対策——」

順天堂大学教授・臨床病理学
小酒井　望

発熱と感染症は切り離せない密接な関係がある．もちろん感染に関係のない発熱もあるけれども，原因不明で一見感染に無関係のような発熱でも，よく調べてみると感染であることもある．したがって発熱の問題は感染症学に関心を持つ人はもちろん，一般臨床医にとっても重要であることはいうまでもない．また感染症を細菌学の立場から研究する臨床細菌学者にとっても，発熱は重要な研究課題である．

畏友吉植庄平博士は最初細菌学を学ばれ，次いで内科学，とくに感染症学を研鑽され，そのすぐれた細菌学的手技を駆使して発熱の問題に取り組まれた．さらに内分泌学にも足を踏み入れられたが，その知識が発熱の研究をさらに進展させるのに寄与したと考えられる．発熱の研究は吉植博士のライフワークであるが，本書はその集積と考えてよいであろう．本書の完成には数年を費し，脱稿後も新知見の挿入のため，書き換え，書き足しをくり返えされたと聞く．それだけに重厚で充実した書物で，発熱に関するすべての新知見がこの中に満ちているといってよい．

私は臨床家ではないし，発熱に関する基礎的な研究をしたこともないので，本書の書評を書く資格はないけれども，感染症に関心を持つ者として，本書の読後感を述べることとする．

本書は体温の計り方，発熱時における自覚症状と他覚症状，微熱を主訴とした疾患，発熱を主訴とした疾患，発熱の立場からみた各疾患，診断のすすめ方と予後の問題，治療，さらに付論（体温調節と発熱）の8部より成っている．各部に自験例を主として多数の症例を引用し，その体温表を掲げ，その論拠を納得させるに足る詳細な解説を述べている．

「体温の計り方」の章では，体温とは何か，どうすれば正しく体温が計れるかが解説されている．いわば本書を理解するための序論であるが，正しい検温のむつかしさをあらためて知らされる思いである．また最後に付論として加えられている「体温調節と発熱」では，その最新の理論が解説してあり，発熱の機序を理解するのに非常に参考になる．

「微熱を主訴とした疾患」「発熱を主訴とした疾患——原因不明の発熱」の章では，その分析のしかたに始まり，多数の実例，さらに内外の統計などが記載され，発熱の面から病態を分析していくうえに大いに参考になる．

巻末には内外の文献が多数掲載されている．

B5版，約350ページの大著であるため，通読するのにかなりの日数を要したが，最後のページを読み終って，その内容の豊富で充実していることにあらためて感歎し，臨床家はもちろん，感染症に関心を持つ基礎学者にも広く本書を推薦する次第である．

（B5，頁360，図209，写真22，色図2，¥ 9,500，〒 200，医学書院 刊）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012

2026/10/13 04:20:04